

[特集：近代西洋人キリスト教宣教師の中国語学習と漢訳]

『天路歷程』官話版にみる十九世紀後半から 二十世紀初頭の官話の一端

The Chinese Mandarin language in the late 19th and early 20th centuries on the
“*Tianlu lichen Guanhua* (天路歷程官話)”

塩山正純

SHIOYAMA Masazumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shioyama@aichi-u.ac.jp

摘要：

本文以十九世紀英國傳教士賓為霖翻譯的《天路歷程》官話版為核心資料，通過針對該資料的詞匯的考察，初步探討十九世紀後半葉至二十世紀初的官話的特徵。通過本文的考察，我們可以了解到以下幾點。《天路歷程》文言版的詞匯在官話版幾乎都換成口語的多音節詞。《天路歷程》官話版有許多兒化詞，這有可能賓為霖顯示出他在北京的學習漢語的成果。關於人稱代詞和連詞的使用情況，賓為霖只用不多種類的詞匯，傾向於簡化使用模式。

キーワード：天路歷程、官話、バーンズ、歐化、異文化翻訳

0. はじめに

17世紀イギリスの牧師バニヤン（John Bunyan: 1628–1688）の代表作である *Pilgrim's Progress* は、聖書に次いで翻訳すべき書物という評価を得て、世界中の様々な言語に翻訳され、各言語版で極めて多くの読者を得た¹⁾。中国大陸においても19世紀半ばから漢訳が始まり、イギリス人宣教師のバーンズ（William Chalmers Burns: 1815–1868）によって1853

1) 永井（2007）11頁及び16頁、宋（2017）153頁参照。

年の初版以降に版を重ねた『天路歷程』と称する漢訳作品は、非常に多くの読者を得て、影響力をもった翻訳作品となった。本稿は、数ある『天路歷程』の漢語訳本のうち1928年に上海美華書館から出版された官話版を主たる資料として、同書の全五巻のうち巻一を範囲として、それ以前に出版された数種の官話訳本の巻一との比較対照もあわせて、バーンズが本書で官話を標榜して用いたことばの特徴について考察する。

1. 『天路歷程』の書誌

ワイリー（1867）の目録は、バーンズの中国語による著作2番目に『天路歷程』を挙げ、文言で漢訳された『天路歷程』の系譜の概要について、以下のように記している²⁾。

天路歷程 T'een loó leih ch'ing. The Pilgrim's Progress. 99 leaves. Amoy, 1853. This is a translation of the first part of Bunyan's celebrated work. It is in 5 books. A reprint was issued at Hongkong in 1856, with a preface and ten pictorial illustrations. The same was printed at Shanghai the same year, with the addition of Milne's discourse on the "Strait gate" (see Dr. Milne's works, No. 3.) as an appendix, in 66 leaves. An edition was printed at Fuh-chow in 1857, by the American Methodist Episcopal Mission, in which the terms for God and Spirit are altered. The edition of 1856 was reprinted at Shanghai in 1862, without the appendix, in 63 leaves, and appeared at the same time in parts, issued in Macgowan's monthly serial. (see J. Macgowan's works, No. 1.) A new edition of the same was issued at Hongkong in 1863. It was again reprinted at Shanghai by the American Presbyterian Mission in 1865, in 55 leaves, divided into 5 books, with the addition of marginal Scripture references, the terms for God and Spirit being altered.]

（天路歷程（筆者注：「巡礼の旅」）発音：T'een loó leih ch'ing。原作名：The Pilgrim's Progress。99葉。廈門、1853年。バニヤンの有名な作品の第一部の翻訳。全5巻。1856年に香港で再版され、序文と10点の挿絵が加筆された。同年、上海でも同一のものが刷られ、付録として「狭き門（官話訳：窄門）」に関するミルンの説話（（筆者注：ワイリーの同目録の）ミルンの著作の第3参照）が66葉で加わった。1857年には、アメリカ・メソジスト監督教会により福州で出版されたが、同版では神と霊の用語が変更された。1856年版は1862年に上海で再版されたが、付録が無く、63葉で、マガウアンの月刊誌『中外襍誌』に分載された（（筆者注：ワイリーの同目録の）マガウアンの著作の第1参照）。1863年には香港で再版された。1865年、北米長老協会によって上海で再び重版され、55葉、5冊に分けられた。余白に聖句が加筆され、

2) Wylie (1867) 175-176頁。

神と靈の用語が変更された。)

さらに、ワイリー (1867) の目録は、バーンズの『天路歷程』官話版についても「官話天路歷程」の項目を立てて、以下のように簡単に紹介している³⁾。

官話天路歷程 Kwan hwá tēen loó leih ch'ing. *Pilgrim's Progress* in the Mandarin Dialect. Peking 1865. This is a version of No. 2. supra, in the Mandarin colloquial.

(官話天路歷程。発音：Kwan hwá tēen loó leih ch'ing。 *Pilgrim's Progress* の官話バージョン。北京、1865年。これは(筆者注：バーンズの著作の)上記第2の官話版である。)

このワイリーの目録は、官話版については初版についてのみ、ごく簡単に説明するのみであるが、これは目録自体が1867年に出版されていることによる。次節でバーンズの中国での活動と『天路歷程』官話版の系譜について詳しく見ていくことにする。

2. バーンズの中国での活動

バニヤンの *Pilgrim's Progress* を全漢訳したイギリス人宣教師バーンズ (William Chalmers Burns: 1815-1868) は、スコットランド生まれ、イングランド長老会から派遣された渡華宣教師で、中国語名を賓為霖或いは賓為廉と称する⁴⁾。バーンズは1847年、香港に上陸して中国大陸での活動を開始し、粵東を経て、1851年に厦門に入り、文言で *Pilgrim's Progress* の最初の漢訳を行った。1854年に一時帰国したのち、1855年再び渡華して上海に入り、汕頭、潮州、福州を経て、1863年に北京に入って数年間活動し、その後、最後の活動の地となった奉天府牛荘で1868年に没した⁵⁾。バーンズの『天路歷程』官話版は、バーンズが北京で活動中の1865年に北京で出版され、その没後も、後述するように20世紀初頭に至るまで版を重ねることになるのである。

3. バーンズの『天路歷程』官話版の系譜について

本節では、永井(2007)、宋(2017)、妮・刘(2018)等の先行研究に基づいて、バーンズによる『天路歷程』翻訳の系譜についてまとめておく。

3) Wylie (1867) 176頁。

4) 永井 (2007) 13-14頁。

5) 宋 (2017) 157-161頁。



『天路歷程』1853年版
オーストラリア国立図書館所蔵



『天路歷程』官話1865年版
オックスフォード大学図書館
所蔵



『天路歷程』官話1928年版
愛知大学図書館所蔵

永井（2007）によると⁶⁾、バーンズ訳『天路歷程』はまず文言で漢訳され、1853年に厦門で初版が出た後、主だったものだけでも、1855年と翌1856年に香港で重版、同じく1856年に上海でも重版され、1857年には福州で重版された。1856年の上海版が1862年に重版され、1863年には新版が香港で出版された。その1863年の香港版が1865年に上海で重版された。1869年には美華書館から改訂版が出された。その後、1872年に上海で、1883年には小書会真宝堂の重刻本がそれぞれ出版されている。1871年には粵語版、1894年には蘇州土白版も出されている。

『天路歷程』官話版はバーンズにより1865年に北京にて完成している。この官話版の1865年初版はオックスフォード大学図書館に所蔵があり、封面には“同治四年季秋鐫／天路歷程官話／京都福音堂藏版”（“／”は改行、以下同）と記されており、バーンズが1863年に北京に入って数年間、北京で活動している間に、北京で翻訳され、北京で出版されたことは確実である⁷⁾。『天路歷程』官話版の刊行の系譜を、妮・刘（2018）に基づいて整理すると、上海美華書館からは1869年、1872年、1906年、1918年、1919年、1933年に重版が出版され、このほか天津華北書会による1892年版、武漢及び上海の聖經書局による1914年、1918年、1933年の版がある⁸⁾。いま手もとで確認できる5種の官話版の封面に記された内容を並べると以下ようになる。

6) 永井（2007）16頁。

7) 1865年の初版以降の版で基本的に巻首におかれた“天路歷程官話自序”の末尾には“同治四年乙丑季夏中旬書於京都客舍”と記されている。

8) 妮・刘（2018）48頁。

- 【1865年版】同治四年季秋鐫／天路歷程官話／京都福音堂藏版
- 【1869年版】耶穌降世一千八百六十九年 新鐫銅版／天路歷程／同治八年 蘇松上海美華書館藏板
- 【1872年版】耶穌降世一千八百七十二年／天路歷程官話／歲次壬申 蘇松上海美華書館鐫
- 【1894年版】耶穌降世一千八百九十四年 官話／天路歷程／歲次甲午 蘇松上海美華書館鉛板重印
- 【1928年版】耶穌降世一千九百二十八年 官話／天路歷程／中華民國十七年歲次戊辰 上海美華書館鉛板

ここから1865年の初版が北京で出版されたのち、1869年の重版以降の版本は基本的には一貫して上海美華書館から出版されていることが分かる。

4. 『天路歷程』官話版はなぜ大勢に読まれたのか

妮・刘 (2018) によると、官話版の『天路歷程』は中国で最も早期に出版された官話による翻訳小説であり、キリスト教宣教師による中国語訳本の中で、中国国内で刊行されて読者の目に触れた総量が聖書の中国語訳に次ぐとされる⁹⁾。『天路歷程』官話版は1865年の初版以来、基本的に巻首に同一の“天路歷程官話自序”をおいており、そこで“凡我教同人，或教外朋友，閱此書者，咸謂是書有益於人，然是書初係文語譯成，高明之士，自能尋文按義，一目瞭然，而庸眾之流，僅能識字，未能解理，仍非予與人為善之心也，緣此重按原文譯為官話，使有志行天路者，無論士民，咸能通曉，雖不諳官話之處，細閱此編，亦較初譯，易於解識”と言うように、より幅広い一般大衆がその教え、内容を、共通語である“官話”で理解できるようにすることを目指していたと言える。

5. 『天路歷程』官話版のことば

5.1 文言的なものが口語的に

まず、1853年初版以来の文言版は、永井 (2017) が指摘する版本間の異同がいずれも

9) 妮・刘 (2018) 48頁。

軽微なものにとどまることから明らかなように¹⁰⁾、基本的にはあからさまな改訂箇所がないほぼ同一の文によって構成されている。ちなみに、『天路歷程』文言版の1853年初版巻一の冒頭は以下のようにはじまる。

我行此世之曠野，遇一所有穴，我在是處偃臥而睡，睡即夢一夢，夢見一人，衣甚破爛，立在一所，面轉室而他視，手執書，背上有大任，又見其展書而觀，戰慄流涕，不能自禁，遂大發哀聲云，我當何為，其情形如是，後乃自歸，盡力強制，蓋不欲妻孥見其憂苦也，但憂苦漸甚，

では、『天路歷程』官話版ではどのようなことばが使われているか。1865年初版以来のいずれの官話版も、本文は基本的に同一である。巻一冒頭の一節は以下の通りである。

世間好比曠野，我在那裏行走，遇著一個地方有個坑，我在坑裏睡著，做了一個夢，夢見一個人，身上的衣服，十分襤褸，站在一處，臉兒背著他的屋子，手裏拿著一本書，脊梁上背著重任，又瞧見他打開書來看，看了這書身上，發抖眼中流淚，自己攔擋不住，就大放悲聲喊道，我該當怎麼樣纔好，他的光景這麼愁苦，回到家中，勉強扎掙著，不叫老婆孩子瞧破，但是他的愁苦漸漸兒的加添

両者を比較してみると、文字数が大幅に増加していることが一目瞭然で、文言の中で基本的に単音節の語が、官話版では複音節の語に置き換わっていることが分かる。動詞では“行”から“行走”、“立”から“站”、“執”から“拿”、“展”から“打開”、“觀”から“看”というように文言的な語彙から口語的な語彙への置き換えがあり、さらに“遇”から“遇著”、“睡”から“睡著”、“見”から“瞧見”など結果補語構造に改めるものもあり、“不能自禁”はフレーズ全体が動詞と結果補語、可能補語の構造に置き換えられ“自己攔擋不住”となり、“我當何為”も語彙が複音節化し“我該當怎麼樣纔好”となっている。

名詞でも“世”から“世間”、“所”から“地方”、“衣”から“身上的衣服”、“面”から“臉兒”、“室”から“屋子”、“背”から“脊梁”というように、口語的な語彙への置き換えがある。さらに官話版では“坑裏”、“身上”、“手裏”、“脊梁上”のような方位詞の追加や、“個”、“本”などの量詞の使用、さらには場所を表す際に動詞に後置する構造から“在”の介詞句の構造への置き替えなどが見られる。

10) 永井 (2017) 17-188 頁で紹介する異同箇所は、例えば1953年版の“時基督徒憂鬱泥中”(5葉表2行)が1869年美華書館本で“時基督徒在憂鬱泥中”(3葉表11行)として場所を示す介詞を加筆する例のように、文字の訂正と増減、同義語の交換など細かいものがほとんどである。ちなみに永井 (2017) が比較対照の資料の一方を1883年小書会真宝堂本としているが、本稿では1853年初版に依ったため、提示する箇所にはずれがある。

5.2 北京あるいは北方官話の特徴は見られるのか

5.2.1 太田（1969）北京語の語法特点をもとに

前述の通り、『天路歷程』官話版の1865年初版は、翻訳者のバーンズが1863年に北京に入ってから以降、数年間の北京での活動期間中に翻訳され、北京で出版されたものである。本書の封面は明確に「官話」を標榜しているが、その「官話」とはいかなるものか。まずは、本書の本文に北京あるいは北方官話の特徴は見られるのか、太田（1969）が示す北京語の7つの語法特点に合致するかどうか、という点から確認してみたい¹¹⁾。なお、各用例の前の数字は「葉・表裏・行」を示し、特に明記しないものは全て1928年に上海美華書館から出版された官話版のものとする（以下同）。

1) 一人称代詞の包括系と除外形を「咱們」「我們」で区別する。

用例はほぼ“我們”で、“咱們”が2例しか無いが、聞き手を含む意図で発話されている。

03a09：易遷說如今咱們兩個在這裏

03b12：易遷就對基督徒道咱們碰見這個怎麼好呢

一方で、“俺”、“咱”など極めて口語的な一人称代詞は用いない。

2) 介詞「給」を有する。

03a16：把榮耀的冕旒給我戴光華的衣裳給我穿

多数の用例がある。

3) 助詞「來着」を用いる。

用例が無い。

4) 助詞「哩」を用いず「呢」を用いる。

多数の用例がある。

01b07：何況遭這審判拉到法場去呢

12a01：這永遠受不完的苦我怎能忍得住呢

5) 禁止の副詞「別」を有する。

僅か3例だが用例がある。

02b12：易遷對固執道別笑話

02b14：基督徒對固執說別叫他回去

6) 程度副詞「很」を状語に用いる。

04b07：住在俗情府那府很大

05b01：有一個文人住在那裏名叫特法那人很聰明

11) 太田（1969）186頁。

文字は“狠”を用いる。また、“得狠（的狠）”の用例が多数ある¹²⁾。

01a09：他的老婆孩子聽了這話詫異得狠害怕得狠

11a03：中間一座宮殿又高大又華麗好看得狠

7) 「～多了」を形容詞の後におき“ずっと、はるかに”の意を表わす。

用例が無い。

以上の7項目のうち、用例数の多寡の差異はあるものの、“来着”と“～多了”を除く5項目に該当する用例があることから、本資料の本文は一定程度の北方語の特徴を持っていると見なすことができる。

5.2.2 アール化された語彙をもとに

また、『天路歷程』官話版には、アール化された語彙が極めて多く用いられており、巻一に限っても98例ある。1853年初版以来の文言版の語彙が、1865年以降の官話版で口語化されて、どのような語彙に置き換わったのかについては、巻一冒頭を例に「5.1」で述べた。本節では、まず最初に1853年初版以来の文言版のどのような表現が官話版でアール化語彙に置き換わったのかを巻一冒頭の10例から見てみたい。各用例の前の数字は1928年上海美華書館の官話版における使用箇所「葉・表裏・行」を示す。

	箇所	1853年版	1928年官話版
1)	01a03	面轉室而他視	臉兒背著他的屋子
2)	01a06	但憂苦漸甚	但是他的愁苦漸漸兒的加添
3)	01a12	又以前言重告之	又把昨兒那些話說了一番
4)	01b03	又顧此顧彼若將奔然	又見他東瞧西看像要跑的樣兒
5)	01b03	然又立焉不去我觀其情	到底還是在那兒站著看他的意思
6)	01b08	何又立此不去	為甚麼站在這兒不走呢
7)	01b09	傳道者乃與之一皮卷	傳道就把一卷兒書給他
8)	01b10	傳道曰我當奔避何處	傳道說我當逃避那兒呢
9)	02a02	終不回頭惟向平坦間而走	纔不回頭瞧單在郊野的[中間兒]走
10)	02a04	兩人尚追之未幾追及	兩個人還是追趕不多會兒趕上了

1853年版と1928年官話版では、前者の単音節の文言的な語彙が口語の複音節の語彙に改められる大まかな傾向が見てとれる。太田（1995）は「北方語の名詞接尾辞“兒”は南京官話においては用いることが少ない」と述べ¹³⁾、日下（1974）も南京官話が「～兒」を極端に避ける傾向を指摘している。一方で、『天路歷程』官話版の巻一で、以上10例の

12) 日下（1974）31頁で、南京官話を志向する書き込みが「まず「～得狠」を避ける傾向があるかも知れない」傾向を指摘している。

13) 太田（1995）247頁。

アール化語彙と同義の非アール化語彙が全く使われないことは無く、“臉兒”に対する“臉”、“様兒”に対する“様子”、“那兒”に対する“那裏”、“這兒”に対する“這裏”、“中間兒”に対する“中間”の用例もあるように、北方の要素を持つもの、南方の要素を有するもの、二つの異なる要素が併用されていることが分かる。このように、ある一つの意味を表す際にアール化語彙のみに集約されている訳ではないが、巻一だけで98の用例があることから、本書の本文は北方「官話」的な要素が色濃いことがわかる。

巻一に見られるアール化語彙全98例の品詞別の内訳は以下の通りである。

1) 名詞

今兒 (17例)、道兒 (13例)、様兒 (7例)、法兒 (3例)、末末了兒 (3例)、名兒 (2例)、牆跟兒 (2例)、過後兒 (1例)、臉兒 (1例)、模様兒 (1例)、氣兒 (1例)、欣兒 (1例)、中間兒 (1例)、昨兒 (1例)、座兒 (1例)

2) 代詞

那兒 (8例)、多會兒 (3例)、這兒 (1例)

3) 形容詞

随和兒 (1例)

4) 動詞

作 (做) 伴兒 (3例)

5) 量詞及び数量表現

會兒 (2例)、些兒 (2例)、一點兒 (2例)、卷兒 (1例)、一會兒 (1例)

6) 副詞

一塊兒 (9例)、漸漸兒 (4例)、白白兒 (1例)、差點兒 (1例)、到了兒 (1例)、快快兒 (1例)、小小兒 (1例)、遠遠兒 (1例)

品詞も6種類と多岐に渡り、合計33種類の語句に接尾辞“兒”が用いられている。そして、“到了兒”や“末末了兒”など、極めて北京語的な傾向のアール化語彙の使用も見られることから、バーンズの北京での活動時に当地で熱心に中国語、この場合は地元の言語である北京語或いは北京官話を習得した結果が『天路歷程』官話版の訳文にあらわれた可能性がある。

5.2.3 欧化の特徴とされること

欧化とされる特徴について、沈 (2022) は北京師範学院中文系漢語教研組 (1959) をもとに、1919年の五四新文化運動以降、中国語が西洋語 (主に英語) の影響を受け、語彙・文法上の変化を蒙ったことをいい、日常の口語表現よりも、文章語の現象を指すのが一般

的であると説明する¹⁴⁾。このように一般的に中国語における欧化は20世紀に入ってからの現象を指すが、キリスト教宣教師をはじめとする欧米人との接触が盛んになった19世紀以降、欧米人が中国語で執筆、翻訳し、中国大陸で多くの母語話者の読者を獲得した作品には、導火線の如く、のちの中国人母語話者自身による中国語の欧化のきっかけとなるような特徴が見られ、『天路歷程』官話版もその一つであるといえる¹⁵⁾。欧化の契機となった表象には様々な特徴があるが、ここでは人称代詞と連詞について見ておきたい。

1) 人称代詞

元来、中国語は一人称、二人称、三人称のいずれもで、代詞ではない様々な表現パターンを持っており、熱心な中国語の学習者にして研究者であった欧米人もそのバリエーションの多さに驚いたことが、数多くの欧米人の手になる文法書、研究書等に記述されている。その一方で、欧米人自らが中国語で執筆する際には、人称代詞の使用パターンを単純化する傾向があった。その傾向に違わず『天路歷程』官話の巻一では、基本的に一人称が“我、我們”、二人称が“你、你們”、三人称が“他、他們”に集約されており、一人称複数包括の“咱们”はわずか2例である。

2) 連詞

中国語では元来名詞を並列してつなぐ場合でも連詞を用いる割合が高いとは言えなかったが、马 (2021a) は同時代の本土資料である『紅樓夢』と『兒女英雄伝』で名詞並列の際に連詞が用いられる頻度の割合が14.0%であるのに対して、『天路歷程』官話版では英語原書 *Pilgrim's Progress* で名詞を並列する際に用いられる“and”の影響を受けて漢訳されたために頻度が53.2%と非常に高く、同時代の本土資料との差が顕著であり、欧化の一つの特徴であると指摘する¹⁶⁾。また、马 (2021b) は『天路歷程』官話版で名詞の並列時に使用される全212例の連詞のうち、“和”が208例で94.8%を占めることが指摘されている¹⁷⁾。このように『天路歷程』官話版では、人称代詞の項でも指摘したように、連詞の使用においても、様々なバリエーションで表現するのではなく、使用パターンを単純化する傾向があることが分かる。

14) 沈 (2022) 57頁。

15) 譚・刘 (2018) は論文タイトルで“汉语欧化”、马 (2021a) は“汉语白话欧化”、马 (2021b) は“汉语欧化”と言うように、『天路歷程』官話版に記述された言語に欧化の特徴が見られるという立場をとる。筆者の立場は、中国語の欧化はあくまで中国語母語話者の使う、書く中国語に表象される現象であり、『天路歷程』官話版は欧米人の翻訳者が自身の母語からの影響を受けつつ、習得した中国語によって執筆され表現された作品として、のちの欧化のひとつの契機となったものとして位置づけるべきである、という考えである。

16) 马 (2021a) 23-25頁。

17) 马 (2021b) 17頁。

5. さいごに

『天路歷程』官話版は、翻訳者バーンズが北京での活動中に完成したものであるが¹⁸⁾、本稿の考察を通して、この『天路歷程』官話版は、今回調査した巻一に限っても、極めて北京語的なものを含む33種類、98例のアール化語彙を、偶々ではなく、おそらく意図的に使用していることが観察できる。翻訳者バーンズが1863年以降北京での活動時に現地の中国人との交流を通じて学習した言語の特徴が見られると言えよう。「官話」と銘打つ『天路歷程』官話版で記述されたことばは、西洋人宣教師バーンズが認識した「官話」の一つの表象であると言えるのである。

また、幾つかの先行研究は、中国語の欧化プロセスの端緒が『天路歷程』官話版にまで遡る可能性を指摘するが¹⁹⁾、本稿の考察に基づき筆者は、『天路歷程』官話版は、翻訳者であるイギリス人宣教師バーンズが、原書の記述言語であり彼にとっての母語である英語を、中国人との交流を通して自身が習得した中国語、この場合は官話の知識に基づいて、中国語（官話）に変換した作品であり、それ以上でも以下でもない、と考える。翻訳のプロセスにおいて母語が翻訳言語の中国語（官話）に影響を与えたことは想像に難くないが、それ自体が中国語の欧化の初期段階であると言うのは難しかろう。あくまで『天路歷程』官話版はイギリス人宣教師バーンズによる翻訳作品であり、中国語母語話者によって記述された中国語ではないからである。一方で、『天路歷程』官話版は譚・刘（2018）が指摘するように、聖書に次いで人口に膾炙した翻訳作品であることから、その読者である中国語母語話者が、『天路歷程』官話版に記述された文体、語彙、語法の特徴から何かしらの影響を受けたであろうことは想像に難しくなく、中国語母語話者による欧化のきっかけとなる役割を果たしたと言えるだろう。

そして、この官話版がほぼ内容、表現に変化を生じることなく版を重ね、多くの中国語母語話者の読者に読まれたことから、北京語を中心とする北方語の特徴が官話の特徴として認知されていくプロセスにおける重要な媒体としての役割も果たしたと考えられる。

参考文献一覧

- 太田辰夫（1964）「北京語の文法特点」『久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念中国研究』（再掲：太田辰夫（1995）『中国語文論集 語学・元雜劇編』汲古書院）
 太田辰夫（1969）「近代漢語」中国語学研究会『中国語学新辞典』光生館
 日下恒夫（1974）「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》の書き入れ—」『関西大学中国文学

18) 宋（2017）154頁に、バーンズが北京に逗留中、北京の教友である京師同文館教友の曹子漁の部屋を借りており、常時往来が絶えず、多くのことを学んだ旨の記述がある。

19) 譚・刘（2018）、马（2021a）及び马（2021b）等参照。

- 会紀要』第5号
- 永井崇弘 (2007) 「W. C. バーンズと漢訳『天路歷程』について」『福井大学教育地域科学部紀要 I (人文科学 国語・国文学・中国学編)』第58号
- 宋莉華 (2017) 『宣教師漢文小説の研究』東方書店 (監訳: 鈴木陽一、訳者: 青木萌)
- Alexander Wylie (1867) *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*. (Reprinted by Ch'eng-wen Publishing Company (1967))
- 譚妮、刘超文 (2018) 《宾为霖官话版《天路历程》的汉语欧化现象研究》《吉林广播电视大学学报》2018年第3期
- 马永草 (2021a) 《“五四”以前的汉语白话欧化考察—以官话译本《天路历程》为例》《北华大学学报 (社会科学版)》第22卷第3期
- 马永草 (2021b) 《汉语欧化的历时考察—以《天路历程》跨越一个多世纪的两个译本为例》《辽宁师范大学学报 (社会科学版)》第44卷第5期
- 沈国威 (2022) 「欧化文法」日本中国語学会編『中国語学辞典』岩波書店